

シンポジウム「行動に還る—感情・表情・身体動作」

2018 年 10 月 13 日
於：立命館大学衣笠キャンパス

〈表/深〉層としての自己——感情・表情・身体動作

中京大学 長滝祥司

感情はしばしば理性と対置される概念である。近代の男性中心主義的な思想の雰囲気の中なかで、男性は理性的であるが、女性は感情的などと言われることもあった。哲学史的にみると、感情には理性よりも遅れて関心が注がれるようになった。特筆すべきは、理性の働きが身体とは基本的に無関係に語られてきたのに対し、感情は主観的な身体感覚や観察可能な表情や行動、身体状態の多様な変化と密接な関係の中なかで捉えられる、という点である。

また、われわれの日常的な直観においても、心的状態の一典型とされる感情は、相当程度、表情や動作（行動）に表出している、とされる。「（他人の）心は（身体の？）内部に隠れており、直接見ることはできない」というデカルト以来の伝統にとって、感情は扱いの難しいものだったのかもしれない。では、感情は表情や身体動作や身体の物理的状态だといえるのか。

本発表では、感情にアプローチする際の複数のルートについて整理しつつ、感情のもつ機能や性質を詳らかにすることで、以上の問いに何らかの手がかりを与えることを目指す。さらに、感情の間主観的な側面に注目することで、人間の相互理解において感情が果たしている役割について考察を加える。

1. Emotion と Passion

感情の原語として想定されるものとして、emotion, passion, feeling などがある。passion の場合、情念と訳し、emotion を情動と訳すこともある。passion は受動性をイメージさせ、emotion は動きをイメージさせる言葉である。passion は、受動的に被るなものと考えられてきた。デカルトの『情念論』は、passion にあたる概念を問題にしている。

相対的に短期的な状態を emotion といつて、持続する状態を passion とする傾向もある。emotion は何らかの行動をトリガーする短期的な（心的・身体的）状態で、passion は持続的で複雑な心的状態を意味しているともとれる。現代の哲学や心理学の感情についての議論では、emotion を使用することが多いようであるが、哲学史の中なかでは、passion のほうがより奥行きと含蓄に富んだ言葉のようである。

本論では、感情という語を emotion に近い意味で使用する。

2. 感情を捉えるいくつかのルート

①主観的・内的に認識される感情

- i. 本人にアクセス可能な身体感覚の主観的变化：怒りに震える、恐怖で身が凍る、喜びでう

きうきする、羞恥で顔が赤くなる感じがする、など。

問 他人からもアクセス可能な部分がある？本人が怒っていることに気づかなくても、身体状態の変化に現れる可能性はある？⇒⇒4で議論する問題と関連する。

ii. (内観によって得られる)本人にのみアクセス可能な主観的状态:主観的に怒りを覚える、恐怖を感じる、うれしいと感じる、恥ずかしいと感じる。

②客観的に観察(認識)される感情

i. 客観的に測定可能な脳状態、心拍数、血流状態、発汗状態、瞳孔の状態など。

問 こうしたデータを集積する脳科学的、生理学的、心理学的研究は、感情のなにを捉えているのか？

問 ジェームズ＝ランゲ仮説(身体反応説)と認知説をめぐる論争にどう答えるか？

ii. 他者から直接知覚される感情

様々な表情や身体動作に現れている感情は、一定程度間主観的に共有される。ただし、文化的な違いがあるのか、自然的なものか社会的に構成されるものか、という問題がある。

3. 感情の身体状態と機能

たとえば、恐怖の感情は急場をしのぐための行為形成をドライブするが、それは恐怖が生じているときの身体状態とどのように関連するのか。

4. 相互理解の基盤としての感情

- ・人間は多様な生物のなかでも、際だって複雑な社会関係を形成している。こうした側面は人間の相互理解をめぐる性質にある。
- ・人間は他人の心を読む存在者であると同時に、他人に心を読まれるという特質をもっている。
- ・感情は、他者理解のベースを形成するための基礎的な部分である(他者理解に関する理論的説明やシミュレーション的な説明に土台を与える)。
- ・他者関係を形成するときに、本人が気づいていなくても他者にわかる、といった感情表出は重要な役割を果たしている。

5. 結論

- ・感情は身体状態として生成する側面があるが、それが他者との社会関係を形成するために基盤となる。
- ・人間が感情を相互に読み合うことによって、互いに読み切れない内部をもつことを直感できる。